

シンポジウム

医薬品の安全監視を考える

「子宮頸がんワクチン」被害からの問題提起

2014年7月27日(日)13時30分～17時

東京大学鉄門記念講堂 (地下鉄「本郷三丁目」徒歩10分、「東大前」徒歩15分)

参加無料・事前申込不要・同時通訳付

英国の臨床薬理学者で、薬害スモン事件で日本の被害者のために尽力し、医学雑誌の編集、コクラ
ン・センター、患者の語りデータベース・ディペックスの活動を通じて多くの人々に影響を与え、88歳の今も
世界各地に招かれて講演活動をしている欧州医学界のレジェンド、アンドルー・ヘルクスハイマー医師と、
HPVワクチン(子宮頸がんワクチン)被害について、いち早く調査チームを立ち上げた西岡久寿樹教授(東
京医科大学医学総合研究所所長)をゲストに招き、HPVワクチン被害を通して、医薬品監視の現状と課題
について、考えます。

■第1部 基調講演

患者不在の医薬品監視

—Pharmacovigilance still neglects patients—

アンドルー・ヘルクスハイマー



■第2部 特別講演

HPVワクチン禍から見えてくるもの

— 医師教育の質と倫理感の低下—

西岡久寿樹

■第3部 パネルディスカッション

日本の医薬品監視の課題とHPVワクチン被害

被害実態調査報告

後藤真紀子

利益相反問題

関口正人

薬害肝炎検証委員会提言から

水口真寿美

コーディネーター

別府 宏圀 / 鈴木 利廣



主催 薬害オンブズパースン会議
共催 医薬品・治療研究会 / 「正しい治療と薬の情報」誌
協賛 日本薬剤疫学会 Task Force 医療消費者と薬剤疫学
NPO 健康と病いの語り ディペックス・ジャパン
問合せ先 薬害オンブズパースン会議事務局 TEL 03-3350-0607

シンポジウム

医薬品の安全監視を考える

「子宮頸がんワクチン」被害からの問題提起

HPVワクチンの被害

全身の激しい疼痛、痙攣、不随意運動、脱力、記憶力や知能の低下など極めて多彩です。多くの被害者が、医療機関でワクチンとの因果関係を否定され、詐病扱いをされています。厚生労働省の検討会の審議も、被害実態を踏まえたものとはなっていません。また、疫学調査も実施されていません。

患者・被害者を置き去りにした医療と医薬品監視がそこにあります。

■第1部 基調講演

患者不在の医薬品監視—Pharmacovigilance still neglects patients

ヘルクスハイマー医師は、常に患者の視点で医療や医薬品監視のあり方を問う活動をされてきました。たとえば

- ・ 欧州で初めて企業の資金から独立した医学雑誌を発刊して、国際医薬品情報誌協会を設立し、臨床試験を批判的に吟味する活動を広めました。
- ・ 抗うつ剤 SSRI について、英国 BBC 放送を通じて患者から直接副作用報告を集め、これを分析して、SSRI が自殺衝動を引き起こすことを明らかにし、英国に患者からの副作用報告制度を創設させました。
- ・ 患者が映像等を通じて、診断時の思いや治療法の選択、副作用の経験を自ら語る「患者の語りデータベース DIPEX (ディペックス)」を創設しました。DIPEX は日本を含む世界9か国に広がっています。

これらの多彩な活動を踏まえて、医薬品監視のあり方について講演されます。

■第2部 特別講演

HPVワクチン禍から見えてくるもの—医師教育の質と倫理感の低下

西岡久寿樹教授は、原因不明の難病である線維筋痛症をはじめとするリウマチ・膠原病系の難病を社会的に認知させ、診断基準や治療法を確立する活動を続けてこられました。そして今、HPVワクチン被害者の病態を解明し、治療するための研究チームを立ち上げ、安易に因果関係を否定することなく、新しい疾患（HPVワクチン関連神経免疫異常症候群：HANS）として治療する必要性を指摘しています。

シンポジウムでは、医師の教育と倫理という切り口で問題を提起されます。

■第3部 パネルディスカッション

日本の医薬品監視の課題とHPVワクチン被害

薬害オンブズパースンメンバーが、被害実態調査報告、利益相反問題、薬害肝炎検証再発防止委員会提言を踏まえて、簡潔にプレゼンテーションをした後、1部と2部のゲストとともに、ディスカッションを行います。

被害者の方々の発言や、会場の皆さんとの意見交換も予定しています。

— 是非、ご参加ください! —

鉄門記念講堂:

東大赤門入り、最初の右手に見える建物を過ぎたら右折、突き当りの建物の左隣のビルの14階です。